

人文フォーラム

24

2006.3



CONTENTS

巻頭言

今、シルクロード

人文学部長 桑原 俊一…… 1

カナダ・ブロック大学

海外研修旅行報告 …… 2

人文学部特別講演会について …… 6

追悼文

永井秀夫先生を偲んで

菱川 善夫…… 7

奥田先生を偲ぶ

宝利 尚一…… 8

研究発表

コンビニの呼称をめぐるって

—「セブン」と「イレブン」の境界— …… 9

Essay

寒い冬の日に熱い豆がゆはいかが

上野 誠治……13

ゼミ室紹介

英米文化学科 岩崎ゼミナール……15

ロシア語弁論大会 ……17

大学院の窓

「全体ゼミ」と大学院説明会

濱 忠雄……19

大学院全体ゼミ報告 ……20

研究、その足跡 ……21

編集後記 ……23

巻頭言

今、シルクロード

—ものの道・文化の道—

人文学部長 **桑原 俊一**



一年は過ぎ去れば一瞬の出来事にさえ思える。一年生は大学生活に慣れてきたころだろうか。2・3年生は学生生活の中にしっかり自分の居場所を見出しているだろうか。4年生は既に卒業後の進路が見えているだろうか。個々人この一年を顧みれば悲喜こもごも様々であった事であろう。いずれにせよ確かに一年は過ぎ去ろうとしている。時の恐ろしさと恩寵を覚えるこのごろである。

近頃のドキュメンタリー番組やフォーラムの一つにシルクロード（「絹の道」「東西交通路」）を特集したり、テーマにするものが目につく。一口にシルクロードといっても数本の幹線路と無数の支路があったが、この語は、一般的にユーラシア大陸はローマなどの西方地域から東方の中国の諸都市を結ぶ陸上交通路を指して使用される。この交易を通して西方と東方は紀元前から数千年にわたる文化の伝播を続けてきたのである。東の終着駅が日本だ。

日本独自の文化はどのようにして成熟してきたのだろうか、その過程を検証する作業はシルクロードによってもたらされたものの道・文化の道を避けて通ることはできない。ことに仏教と日本文化の関係は密接で、「心」（精神文化）のテーマに足を踏み入れるや、数々の道の歴史とドラマが織り成す不思議に出くわす。ある新聞の特集（昨年12月3日）なのだが、東大寺別当、森本公誠氏の講演要旨が掲載されていた。それによると仏教は東西交流の結果もたらされ宗教思想であって、その背景に須弥山（しゅみせん）世界観があるという。それは須弥山という宇宙軸を設け、そこに様々な神々を据える考え方だとされる。例えば、東大寺の大仏様の連弁に描かれた図に須弥山がみられる。華嚴経に基づくもので、下のほうに七つのハスの花びらが並び、一つ一つに須弥山世界が描かれる。須弥山が世界の中心で、その周りを太陽や月が回る。

仏教がインドに起源を持つことは誰もが知っている。東大寺の須弥山もインドの世界観から伝えられたことだろう。古代インドではこの山は「メール山」と呼ばれていたそうである。森本公誠氏によれば「メール山」の形状とその後の思想的発展などから推測すると日本に伝わった原型は古代イランの「ハラー山」世界観にたどり着くという。イランの西隣トルコとアルメニア国境には洪水後ノアの方舟が漂着したと伝えられる「アララト」山がある。世界最古のキリスト教アルメニア正教の聖山だ。洪水伝承と聖山の世界観はギリシャから西アジアそしてインドや中国に広く分布する。これらは西と東を結ぶ僅かな例証に過ぎないが、古来、交易に伴う東西の文化交流という悠久の歴史は存在しているのである。

人文学部の新カリキュラムは日本文化学科と英米文化学科に共通する科目をさらに充実させた。両学科はまさに現代のシルクロードとしての役割を担うことになるだろう。

カナダ・ブロック大学 海外研修旅行報告

カナダ・ブロック大学での英語研修

英米文化学科 栗原 豪彦

今年度で5回目となる本学人文学部によるカナダ・ブロック大学海外研修旅行（「国際文化演習」2単位）は、2005年9月4日より9月24日まで同大学の英語集中プログラム（Intensive English Language Program、以下 IELP）における3週間の特別プログラムとして、英米文化学科の2年9名、3年14名、4年1名、合わせて24名（うち11部学生2名）が参加して行われた。

IELPは、世界中から200名以上の学生を集める定評ある14週の集中プログラムであるが、ブロック大学が本学の学生のために用意してくれた3週間のプログラムは、9月6日（火）のオリエンテーションとプレースメント・テストに始まり、9月8日（木）から9月23日まで朝9時から午後3時までの英語4技能のレベル別クラス（50分授業）5コマの授業であるが、この他、課外活動として、日曜以外のほぼ毎日、午後3時以降には各種のレクリエーションに参加して多様な研修の実をあげることができた。

学生たちは各国の学生と積極的に交流を深め、多様な英語や異文化に触れたほか、ホストファミリーの温かい心遣いのもとでカナダの社会と文化に直接触れる貴重な体験をした。季節外れともいえる好天にも恵まれて、美しいキャンパスと St. Catharines の町やナイアガラ瀑布など雄大な自然を堪能した。なお、IELP スタッフの本学の学生に対する評価も大変好意的なものであった。帰国時に台風の影響で成田に着陸できず、関空近くのホテルで一泊するという想定外の出来事はあったが、3週間の有意義な研修旅行を無事に終えることができたのは2名の引率教員（米坂先生と小生）にとって何よりであった。



カナダで学習したこと

3年 英米文化学科 山口 華絵

私は方向音痴だ。札幌に生活して21年となる今も、自宅の近くや、何度か行ったことのある場所なら兎も角、いつも使っている道と一本隣の道に迷い込んでしまうだけで、自分が何処にいるのかわからなくなってしまうのである。札幌に生活していて良かったと思うのは、まさにそんなときで、街の中で迷ってもテレビ塔を目指して歩けば何とか見知った土地に出ることが出来る。カナダに行くことになって、何よりも心配したのは語学力よりも自分の方向音痴のことだった。語学力に関しては、自分は英語を話せないから話せるようになる為にカナダまで行くのだし、ホームステイ先のホストマザーも学校の先生もそのつもりで接してくれるだろう。但し、方向音痴だけはどうにもならない。いざ迷ってしまったら、道を尋ねる相手は此方がノンネイティブだとは気遣ってはくれない人たちがばかり。しかし、迷ったら自分から聞かなければ誰も助けてはくれないだろう。悶々と悩んでいるうちに出発日が来た。出発当日、空港の中でさえ道順が怪しい。昼食を買いに出たのは良いが、友人が居なければ搭乗ゲートまで戻れたかどうか。本来、初めて海外に出る人が持つ不安感とは別の不安感を持って、カナダはセント・キャサリンスでの語学研修が始まった。

授業は、事前のプレースメンステストで自分のレベルに合ったクラスに配属されていたのに拘らず、始めはクラスメイトが何を言ってい

るのかわからなかった。しかし、一週間目が終わるころには、彼らは出身国によって独特のアクセントや発音があることに気が付いた。単語のボキャブラリーが多いわけでもなく、発音も所々聞き取り難い所がある。けれど、それに臆することなく会話をする彼らを見て、「ああ、完璧な文章で話さなくても良いのだ」と、目から鱗が落ちる思いであった。単語の羅列だけでも、伝えようという意味さえあれば相手はわ



かってくれるものだ、と実感した。

また、滞在中はナイアガラの滝をはじめとして様々な場所を訪ねる機会に恵まれた。晴天に恵まれたこともあり、そのどれもが楽しく、また、文化の違いを学ぶのに現地を訪ねることに勝るものはないと痛感した。街並みやその場の雰囲気など、言葉で表すことが出来ないものが、現地にはある。

そして今私は、滞在中色々な方々が言っていた、「恐ろしいほど寒い」セント・キャサリンスの冬を経験するため、再び彼の地を訪れる機会を窺っている。



ワンダフル・カナダ

3年 英米文化学科 高野 悠己

初めての海外渡航、まずは一言「楽しかったー!!」。本当に有意義な3週間を過ごすことができました。カナダの素晴らしい景色、空はどこまでも青く大きく、色んなものがビッグサイズ（ご飯、家、道路、人も!?）。それらをこの目で実際に見て感じて、たくさんの心優しい人々との出会い、新たな経験と大切な友人を得ることができました。

3週間の英語研修。期間は短くてもこのブロック大の英語授業で行く前と行った後で、自分の英語力が多少なりとも上がったと思います。特にスピーキングとリスニング力。英語が日常生活に溢れている環境でその多くの時間を英語で話してコミュニケーションを図る。異国の友に自分の言いたいことを伝えたい!という思いが会話力を上げたと思います。文法めっちゃくちゃ、変な発音ですが、意思はある程度伝わりました（と、自分では思っていますが……）。話そうとする勇氣、大切なあと実感しました。何より、海外の友達との交流が深まるにつれ、もっと英語で伝えたい!という熱意が前にも増して沸きました。

授業外のアクティビティは本当充実していました!数々の思い出深い出来事。まずはナイアガラの滝。これはもう「な、なんだこれはー!?!」と本当言ってしまったほどの驚きでした。滝というか、大洪水発生!といった壮大さ。近くにゲームセンターやレストランなどもあり、ナイアガラには合計3回も行っていました

(笑)。その他に、トロント小旅行、ボウリング大会、ワイナリー見学（貴重なアイスワインを試飲）、映画鑑賞、ナイアガラ・オン・ザ・レイクの美しい町並みを散策、大学近くの公園へピクニック、町のバーに色んな国の人が集まってみんなで飲みに行ったこと数回……楽しかった思い出たくさんです。滞在中ほとんど晴れていたことも幸いでした。カナダのでっかい青空は本当に爽快でした。ナイアガラの滝に友達何人かで行ったときは、帰りのバスの乗り場所がわからなくなり何人もの人々に道を尋ねました。みんな本当に親切。中には自分がわからなくても何とかして答えようと、周りの人を呼び止めて聞いてくれる人もいました。予期せぬハプニングでしたが、町の人々の温かさに触れた良い思い出になりました。

カナダでの生活、毎日がとても濃くて充実した3週間でした。大学で知り合った韓国の友達とは、本当に気が合い、いつも二人でお互いつたない英語を駆使して話していました。彼とは今でも連絡を取り合っています。必ずまた再会するでしょう!!そして忘れてはならない、共に研修に参加した北海学園の仲間達。本当に会えて良かったと思います。やはり人との出会いこそ、一番大きな収穫であり喜びではないでしょうか。

カナダで過ごした日々を忘れはしないでしょう! Thank you everyone!!



カナダブロック大学の研修を経て

2年 英米文化学科 菊池亜由美

今回のカナダブロック大学での研修は私にとってとても自分を向上させる研修であり、将来を見据える研修になりました。

カナダに到着し、一日目、二日目は全てが英語であるという環境下に置かれ、ホームシックになりかけました。しかし、三日目くらいからは少しずつ生活に慣れてきて、一週間も経たないうちにもっとカナダにいたいと思えるほどになりました。私たちの研修が始まったのはちょうどカナダの新学期が始まる時期と同じであったため、毎日のようにいろいろな催し物などがあり、たくさんの国の人々と友達になりました。授業はグループでのディスカッションやプレゼンテーションなどで、クラスメートと一緒にやる作業が多かったこともあり、クラスメートとは授業を受けるたびに仲良くなっていきました。クラスには韓国、中国、台湾、スペインとさまざまな国の出身者がいたので、休み時間や教室移動の際、それぞれの国の人気のアーティストの話をしたり、音楽を聴きあったり、他国の言葉を教えてもらったり、日本語を教えてあげたりと楽しく過ごしました。



ホームステイ先では、私が言葉に詰まっても話し終わるまで待って聞いてくれたり、間違えたら正しい言葉に言い直してくれたりと、とてもやさしく親切でした。滞在中はカナダ、日

本、札幌についてや日常の話など、たくさんいろいろなことについて話をしました。また、カナダ人はスラングが好きらしく、ホストファミリーにいくつかスラングを教えてもらいました。共に時間を過ごしていくうちに、カナダの人々の考え方や常識といった面を少しだけ知ることができたと思います。しかし、これらのことを理解していなかったことと、英語で自分の意思をきちんと伝えることができなかったことから生じたちょっとしたトラブルがありましたが、このおかげで私はカナダ人の常識を学ぶことができ、またホストファミリーとの仲も一層深まったと思います。



英語に関しては、日常使用する言葉や言い回し、受け答えなどは生活していくうちに学ぶことができたと思います。帰国する頃にはだんだん耳も英語に慣れてきて、聞き取れるようになっていきました。

三週間という期間はとても短く、あっという間に過ぎていきました。英語を学ぶことによってたくさんの人とコミュニケーションをとることができるということを改めて実感しました。また、もっと熱心に英語を勉強し身に付けたいという思いは、この研修を通して一層強くなりました。よって、今回のこの研修は私の将来へ影響を与えるだろうと思うほど、私にとってとても大きな経験でした。

人文学部特別講演会について

12月17日土曜日の午後、人文学部特別講演会が開催された。講師としてお招きしたバーバラ・ピッツィコーニ氏（Dr. Barbara Pizziconi）は、ロンドン大学東洋アフリカ研究所（SOAS）日本研究センターの研究員と学部、大学院の助教授であるほか、現在は早稲田大学大学院日本語研究・教育センター客員研究員として研究活動を行っている。同氏は英国だけでなく、ヨーロッパ、日本における日本語研究、とりわけ、西洋から見た日本語のポライトネス（敬語）研究の発展に積極的な役割を果たしている。

講演では、日本における敬語研究の概要説明のあと、語用論的観点からの西洋のポライトネス理論（by Brown & Levinson）とその限界について論じる最近の学説の紹介が行われ、ポライトネスの捉え方の多様性、流動性等の論点が示唆された。さらに、ピッツィコーニ氏の最近の研究に関連して、日英の「丁寧さ」、あるいはポライトネスという概念から連想される語彙の意味領域を記述する調査研究について紹介された。その調査は、連体修飾語としての日英の「敬語的語彙」を英国英語母語話者と日本語母語話者に自由記述してもらい、両者の上位10語彙を選び、それらを45種のペアに組み合わせ、その類似性を1から5までのスケールで求めるものであった。対応分析の結果、英語では、polite, well-mannered, courteous といった（1）改まり性（affectedness）と nice, kind, friendly ～ distant, educated, appropriate といった（2）活動性〔（activity）の高いもの～低いもの〕を示す語彙が二つの次元にクラスター（群生）分布され、日本語では、「上品な、丁寧な、礼儀正しい」（改まり性）が一次元、「誠実な、親切的な、思いやりのある」から「謙虚な、へりくだる、遠慮がちな」（活動性：明示的～暗示的）がもう一方の次元というように、日英のポライトネス関係の語彙はそれぞれに特有の意味ネットワークをもつものの、深層次元では日英に類似性があることが示された。

ピッツィコーニ氏は、ローマ大学（学士）、東京外国語大学（言語学修士）、ナポリ東洋大学（日本語言語学博士）で学位を取得後にロンドン大学 SOAS 学部、大学院に赴任され、爾来、ヨーロッパ日本研究の言語部門で中心的役割を果たしてこられた。日本語が堪能であり、論文・著書のほか、口頭研究発表においても英語、日本語の両方の業績を数多く有し、海外と日本における日本語研究の交流と発展のための架け橋となっている。

今回の特別講演は日本語で行われ、会場に集まった65名の教員、学生、院生、一般市民の参加者が熱心に聴講、講演後は質疑応答の時間が設けられ、参加者からの質問に最後まで丁寧に答えていただいた。

（中川かず子 記）

〈寛容〉という美德 永井秀夫先生を偲んで

北海学園大学名誉教授 菱川 善夫

永井秀夫先生が、平成 17 年 12 月 12 日に永眠された。いつも颯爽とした御姿で、永遠の青年のイメージがまぶたに焼きついていただけに、まさかと思われた方が多かったのではあるまいか。

12 月 16 日、午前 10 時から、札幌グランドホテルで、「永井秀夫先生 お別れの会」が開かれたけれど、故人の御遺徳を慕うたくさんの人々を前に、遺影の中の先生は、いつものように、にこやかにほほえんでおられ、こんな冗談はやめにしようよ、といいますぐにでも立ちあがってきそうな気配であった。

東京大学文学部国史学科を御卒業ののち、1956 年に、北海道大学文学部講師として赴任されたけれど、「お別れの会」での奥様の御話によると、講義の壇上で、すでに煙草を手になされていたという。教壇が、教育という魔物に支配されて、聖域化した現代では考えられないことだが、このリベラルな御性格が、年齢とともに磨かれ、永井先生に〈寛容〉という美德をもたらしたのではあるまいか。

永井先生が北海学園大学に赴任されたのは、人文学部が開設された平成 5 年の年である。以来平成 13 年まで、8 年間にわたって教育と研究で御尽力いただいた。ちょうど人文学部の基礎をつくりあげる時期であっただけに、カリキュラムの策定や人事問題、学内での調整など、いろいろな問題が押し寄せてきた時にあたっていた。経験豊かな先輩として、私はいろいろ相談に乗っていただいたが、そのつど、先生の指の間から紫煙が立ちのぼったのも、いま思えば懐

かしい。

煙草の煙の想出など語って何になるか。そう思う人は勝手に思えばいいだろう。しかし煙草の煙にさえ人格はあらわれる。永井先生の煙には〈寛容〉の味があった。文学者の煙草のように、自意識が過剰だったり、デカダンのいやみがない。権威をふりかざすことのない自在さが、人の心に安心感を与えるのだ。

先生の担当された講義は、「日本近代史」と「北海道史」である。明治国家形成期における日本近代化の問題が、先生の研究の中心的なテーマであった。「北海道は日本近代史の中でどんな位置を占めるのか」（「私の研究テーマ」・「人文フォーラム 8」）という問題意識は、学部創設期に日本文化学科の先生方で組織された共同研究「近代日本における文化・文明のイメージ」でも、みごとな指導力となって発揮された。それを記して感謝の結びとしたい。



奥田先生を偲ぶ

英米文化学科 宝利 尚一

訃報が突然きました。2005年（平成17年）7月30日、奥田崇之先生は肺炎で逝去されました。74歳でした。大柄な身体に優しいまなざし、いつも笑顔で学生に接していました。

村山出元人文学部長は6年前に「（奥田教授の）人柄と学風は悠揚せまらぬ気品があった」と記しました。船岡誠教授は、人文学部が発足した当時に難題を抱えていた中で「（奥田教授には）バランス感覚があった」と話します。

奥田先生は1992年（平成4年）春、「残雪に寒風の吹く札幌」に着任しました。人文学部発足の1年前でした。先生は1997年（平成9年）4月から人文学部長を務めましたが、2度の大病で任期半ばに職を辞しました。そして2000年（平成12年）春、思い出深かった学園を“卒業”しました。

奥田先生は生前「ジャーナリストの目で現代の国際問題、メディア問題をビビッドに取りあげていきたい」と話していました。「実学」を重視する言葉でした。

1993年度北海学園大学研究助成を受けて実施された共同研究「国際化＝異文化理解に関する方法論的研究－文化障壁を緩和する効果的施策確立に関する考察」の研究代表となり、同時に中川かず子教授と「日本語教育から見た北海道の国際化」を執筆しました。

日本各地の「国際化」の現状を調査するため、中川先生と奥田先生は東京、横浜、大阪、神戸、福岡、長崎など、日本各地を訪れました。中川先生は「奥田先生は私が旅先のおいしいものをよく知っているから助かる」と言っていました。でも、インタビューになると、奥田先生は鋭い質問をしていました」と話します。ここでも奥田先生の「実学」重視の姿勢がうかがえます。

私にとって奥田先生は「悠揚せまらぬ指導」をしていただいたジャーナリストの先輩でした。奥田先生はかつて読売新聞外報部（現国際部）の欧州問題担当記者で、イタリア語と英語が堪能でした。新米記者の私に、奥田デスクは英語とフランス語の新聞に毎日必ず目を通すこと、外国に行っても日本人の心を忘れないこと、などを静かに話してくれました。

奥田先生は必要な時には筋を通し、苦言も呈しました。1998年（平成10年）に読売新聞北海道版にエッセーを寄稿し、北海道人の運転マナーの悪さを皮肉り、吹雪の多い冬季には昼間でもヘッド・ライトを常時点灯すべきだと主張したことがあります。掲載直後に北海道警察本部の交通担当責任者が来校し、奥田先生から欧州の自動車事情などを「取材」して帰ったと言います。

奥田先生の思い出は尽きませんが、何よりうれしかったのは元奥田ゼミの卒業生の一人が発足したばかりの大学院英米文化専攻修士課程1期生として、私と共にメディアについて学んだことです。奥田先生、どうか安らかにお眠りください。



コンビニの呼称をめぐる

－「セブン」と「イレブン」の境界－

導入： 徳永 良次（日本文化学科）

この話は、北海道では、コンビニの「セブンイレブン」を省略して呼ぶ時に、「セブン」という地域と「イレブン」と呼ぶ地域が偏在していることを、数年前に私のゼミに所属していた旭川出身の学生さんから聞いたことから始まります。

そこで、今年度の「日本語学概論」の授業でアンケート調査をするともに、学生有志を募ってこの結果を分析し、さらに独自に上川地方のデータを補強してまとめたものを授業で発表してもらいました。

文章の未熟さ、分析結果の不確定さや、この問題が今後どのような研究課題になりうるか、などはまだまだ未知数ですが、短期間で多くの追加データを集めたり、直接セブンイレブンに問い合わせるなどの行動力は大いに評価されるべきだと思います。それにしてもわずか 30 年程の間に、このような一種の「方言形」が形成されることに、人々のダイナミックな言語生活（古い表現ですが）を感じ取ることができました。

新方言を求めて……

1 年 J1 組 石黒 勝也（文責）

秋元進也・池田知佳留・石垣智也
中野裕介・村太里江

「方言」と一言聞くと何を思い浮かべるだろうか。自分が幼いとき住んでいた地方独特の言葉、祖母または祖父の話している言葉など意外にも私たちの身近な日常生活の場面で多く耳にすることが出来る。「方言」＝「古い言葉」として考えてしまっていないだろうか。確かに、古い言葉と言わざるを得ないことも無い。「方言」といえば全国津々浦々、地方ごとに独特の言語文化を確立していったものである。例えば、現在住んでいる北海道の「なまら」「～だべ」「しはれる（物凄く寒い）」などの北海道方言。「どさ（何処行くの?）」「せばねえ（さようなら）」などの津軽方言。「～さぁ」や「なんくるないさぁ（なんとかなるさぁ）」のようにかなり独特な表現の沖縄方言、など各地に見受けられる。しかし、これらは現在の私たちが 100% 純粋な形で使っているのかと言われたらあまり使って

いないのが現実である。そして、いつからか言葉の温かさ・柔らかさなどは失われ全国的に平準化されてしまった。

今までいくつの新しい言葉が生まれ社会で取り上げられ消えていったのだろうか。その中でも未だに使われている言葉も消えずに存在している。私たちは社会が日々大きな変化しているのと同時に言語も大きく変化していることを忘れてはならない。今回、『日本語学概論』の授業で「方言」について学ぶ機会に巡り合え、徳永先生の一言があったからこそ有意義な調査時間を最高の仲間たちと共に過ごせることができ、言語文化の変化の一端に微力な私たちが少しでも触れられたことを嬉しく思う。この調査に協力していただいた皆様に感謝し、本題に入っていきたいと思う。



今回私たちは、新方言の発見というテーマの下、全国的に有名なコンビニエンスストアの『セブンイレブン』が北海道ではどのような略称で呼ばれているか検証・考察しまとめた。本発表では『セブンイレブン』のどのような略称が、どのような経緯で広まったか述べていきたい。

まず、『セブンイレブン』の歴史であるが、1950年代中頃～1970年代前半の高度経済成長は本格的な工業化社会を作り出し、大量生産・大量消費による空前の消費ブームを生んだ。セブンイレブン・ジャパンが設立された1973年は、日本の小売業者にとって一つの新紀元になった年である。この年の9月に「中小小売商業振興法」が公布され、中小企業の活性化が図られた。10月には「大店法」が公布された。日本に上陸したのは意外に最近で、1974年第一号店である東京都江東区豊洲店がオープンした。

北海道には1975年5月28日に、北海道第一号店である「札幌市北33条店」が誕生した。そ

の後、同年の5月30日に札幌市豊平旭町店が誕生し、次の日には札幌市南32条店が出来た。なぜこの3日間に集中して札幌にセブンイレブンが出店したかということ、セブンイレブンの企業戦略である『高密度多店舗出店（ドミナント方式）』によるものである。これは、店舗ごとに商圏を隣接させながら店舗網を広げ、そこから知名度をアップし、鮮度のよい商品供給を行うことを目的としたやり方である。①チェーンの認知度の向上②来店頻度の増加③物流効果の向上④加盟店さまへの経営学についてのアドバイス時間の確保⑤広告効率の向上などが効果として期待できるわけである。そして、ある程度札幌で認知され始めると、同年の6月30日には、札幌以外の店舗である小樽塩谷店が誕生した。北海道第二の都市である旭川には1984年5月23日の旭川新富店で、さらには函館に進出したのが1988年7月16日の函館中道店であった。札幌に比べて6～8年のひらきがあることが分かった。私たちの予想では、北海道一の大都市である札幌を中心に旭川、函館、など徐々に大都市に広まっていったと思っていたが、意外にも札幌に近いところに札幌に次ぐ店舗が存在し驚いた。故に、「セブンイレブン」の呼び名もこのような店舗展開と同じように広まったのではと考えた。

ここで、アンケート調査について説明したい。今回「セブンイレブン」名称調査を実施す





るにあたり、1部日本語学概論の授業を受けている学生数132人のデータと、それとは別に発表グループのメンバー各自で集めたアンケート233人分のデータを合わせた365人のデータを基に考察した。調査対象は主に上川支庁・胆振支庁・渡島支庁を中心にその近辺で生活している私たちと年代の学生にアンケート調査を実施した。結果は別紙の資料のように、札幌や大方の都市で確認されたセブン派・上川、胆振、渡島で多く確認されたイレブン派・オホソドックスなセブンイレブン派・オホーツク海側に多かったブンブン派の四つに大きく分けられることが分かった。ここで注目したいのは特徴的な広がり方を見せたセブン派とイレブン派である。セブン派は、全道に広まりを見せていて札幌、旭川、函館、帯広、など大都市に多く確認できた。イレブン派はなぜ特徴的かというと、限られた箇所に集中して確認できたからである。

次に、検証と考察である。まずは、セブン派の地図を見てもらいたい。札幌を中心に右上に徐々に広がり旭川や名寄までに広まっている。道東では、帯広を中心に釧路や襟裳などの地方にも広まりを見せているが、石狩・空知地方が最も多かった。一方、イレブン派はどうであったかということ、旭川が最も多く次に岩見沢、室蘭、函館と続く。大都市札幌ではあまりメジャーな名称ではないらしい。アンケートでは

札幌出身者が多かったがその中でイレブンという回答をした者は少ないという結果だった。

セブンイレブンの名称の関連性を考えてみると、どうやら札幌が「セブン」という名称の発祥の地であると考えられる。そして、札幌での「セブン」という名称が全道に広まる前に旭川・函館・室蘭・岩見沢などにセブンイレブンの店舗ができその土地で独自に「イレブン」という名称が出来たのではないだろうか。他の都市で「セブン」が多いのは札幌（ここで札幌を北海道で最も影響力のある都市と仮定する）で定着した後、店舗数が全道に拡大すると同時に「セブン」という名称が広まったのだと推測できる。しかし、この私たちの説はデータが少なく信憑性に欠けるものになってしまった。全道的に調べるとよりはっきりとした分布・勢力地図が出来るのではないだろうか。さらに、インターネットで調べてみると名称が他にもあってセイブレ・セブレなどが確認された。北海道だけで名称が分かっているわけではなく全国的に名称にズレがあるのだ。今後さらにデータを取り続けより詳細にまとめていきたいと思う。

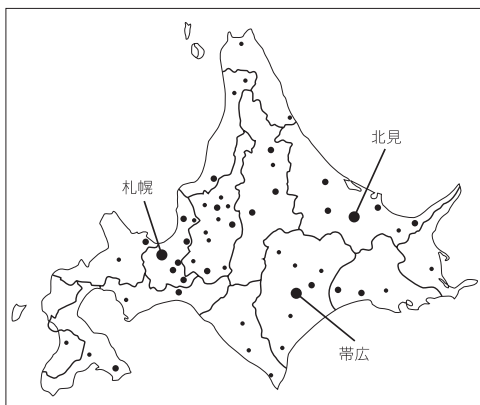
最後に、この調査のきっかけを作っていた徳永先生、アンケートに協力していただいた皆様、調査グループのメンバーに感謝します。

資料

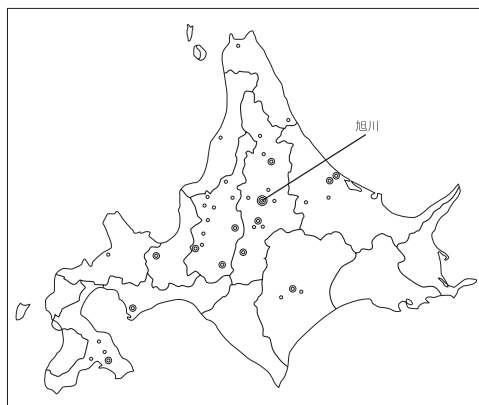
〈資料の見方〉

- ・黒丸の地図が「セブン派」の地図です。丸が重なっているのは「イレブン派」です。
- ・丸の大きさが人数を表しています。大きければ大きいほど、丸が重なれば重なるほど人数が多くなるようになっています。

セブン派



イレブン派



セブン派

札幌	103	幕別	3	美幌	1	当別	1
帯広	19	滝川	3	沼田	1	浦臼	1
北見	13	網走	3	江差	1	枝幸	1
湧別	9	小樽	3	静内	1	音更	1
紋別	6	恵庭	2	夕張	1	岩見沢	1
上湧別	6	斜里	2	大樹	1	奈井江	1
旭川	5	芦別	2	池田	1	訓子府	1
釧路	4	由仁	2	白糠	1	幌延	1
石狩	4	士別	2	上磯	1	砂川	1
留萌	4	名寄	2	清水	1	手塩	1
函館	4	美唄	2	富良野	1	赤平	1
苫小牧	4	浦河	1	倶知安	1	風連	1
千歳	4	伊達	1	別海	1	計	253
江別	3	鹿追	1	襟裳	1		
遠軽	3	広尾	1	稚内	1		
北広島	3	栗山	1	南幌	1		

イレブン派

旭川	78	士別	3	枝幸	1	羽幌	1
岩見沢	8	上湧別	3	東川	1	深川	1
室蘭	7	富良野	3	遠軽	1	稚内	1
函館	7	東神楽	2	幕別	1	上磯	1
札幌	5	夕張	2	名寄	1	秩父別	1
湧別	4	美唄	1	岩内	1	雨竜	1
沼田	4	七飯	1	芦別	1	北竜	1
帯広	2	美瑛	1	愛別	1	計	146

寒い冬の日に ● 熱い豆がゆはいかが

英米文化学科 上野 誠治

マザーグースの中に、日本の「せっせっせ」に似た、次のような手遊び歌がある。

Pease porridge hot,
Pease porridge cold,
Pease porridge in the pot
Nine days old.

ここでは、この歌から連想されることを幾つか述べてみたい。第一に、pease porridge とは、「エンドウ豆のお粥（ポリッジ）」のことであるが、pease は現代英語 *pea* の古語である。pease は元は単数形であったが、16 世紀にはその複数形として *peasen*、*peses* に加えて語末音 *-n* の脱落形 *pease* などもあった。そして、この単複同形になった *pease* は、やがて語末の *-se* が複数語尾と感じられ、新しい単数形 *pea* が生じたというわけである。これに類する過程を経て生じた単語に、*burglar* *v.* (< *burglar n.*)、*editor* *v.* (< *editor n.*) などがある。これは逆成と呼ばれる現象である。

また、*pease* は、異分析の例として紹介されることもある。異分析とは、本来の語源と異なる方法で分析されることで、よく引用される例に *an apron* (< *a napron*)、*a nickname* (< *an ekename*) などがある。これをふまえてもう少し正確に言えば、*pease* の場合は、その語末にある *-se* が複数語尾と異分析された結果、逆成により *pea* という新しい単数形が形成されたのである。

第二に押韻形式を見てみると、*abab* の典型的な 4 行連となっている。また、*oatmeal porridge*、*corn porridge* など、どんな種類のポリッジでもよかったのであろうが、*pease porridge* が選ばれたのは /p/ 音の頭韻が考慮されたためかもしれない。頭韻は古代ゲルマン詩の特徴であるが、現代でもことわざ、成句、ネーミングなどに好んで用いられている。*Care killed the cat*、*Micky Mouse*、*Donald Duck* などがその例である。

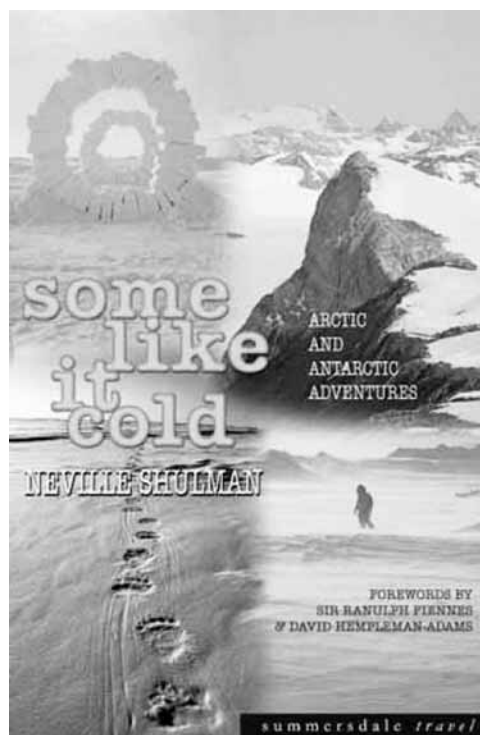


第三に、この歌には次の4行が加わるが、

Some like it hot,
Some like it cold,
Some like it in the pot
Nine days old

マリリン・モンロー出演の喜劇映画『お熱いのがお好き *Some Like It Hot*』の題名の由来がここにあるのはもうおわかりだろう。ちなみに、読んだことはないが、やはりここからとったと想像される書物(題名 *Some Like It Cold*)もある。副題には *Arctic and Antarctic Adventures* とあるので納得がいく。マザーグースからの引用は英米人の琴線に触れる洒落たタイトルになるのであろう。

こんな七面倒くさいことは、もちろん考えもせずに、我が家の子供たちは幼い頃ビデオを見ながら無邪気にこの手遊び歌を「ピー・ポリッ・ホッ」と歌っていた。これも語末音の脱落ということになるのだろうか。



ゼミ室紹介

「平取・二風谷フォーラム 2005」で ボランティア学生たちが大活躍

英米文化学科 岩崎ゼミナール

2005年8月5日から7日にかけてウタリ協会平取支部と平取町の協賛により「平取・二風谷フォーラム 2005」が開催された。このフォーラムは国連先住民族の10年を記念して1993年に同地で開催されたフォーラムの継続事業であり、2005年のフォーラムは焦点をアジア諸国の先住民族とし、16名の先住民族の代表たちがインドネシア、タイ、マレーシア、インドなどから集まった。岩崎ゼミの総勢30人の学生たちは、フォーラムの準備から運営、片付けまでにボランティアとして参加した。

フォーラムには海外からの代表に加えて、アイヌ民族をはじめとして、日本全国からたくさんの人々が集まり、アジア諸国の先住民族が抱える問題を熱く語り合った。フォーラムの期間中、学生たちはフォーラム関係者250人の食事の準備や各会場の受け付け、会場の管理、また通訳として海外からのゲストとともにホームステイをするなど、体力はもちろん接客マナーや英語力などを求められるボランティア活動を行った。その活躍ぶりに、フォーラム主催者は「北海学園大学の学生さんはとても良く働く」と



絶賛。

最終日には「先住民族伝統食フェスティバル」を開催し、フォーラム参加者の出身民族の伝統的料理を地域の人々が学び、共に料理して味わうことを通して、先住民族の伝統的食文化の理解を深めた。カナダ・デネーの「鹿肉シチュー」や台湾原住民の「金針花肉糸湯：乾燥ユリと豚肉の細切りスープ」、アイヌ民族の「ユクオハウ（シカ汁）」、インド・タリットのダブル・カ・ミタ（結婚式のお菓子）やタイ・カレンのカレン料理、また珍しい青竹に鳥肉やマグロを詰めて焼いたマレーシアのオランアスリの料理など、



平取・二風谷フォーラム開会式



儀式に用いるトノト（酒）を準備する



台湾原住民の鳥肉と竹の子の煮物



朝食も自炊

先住民族の伝統料理

身近な食材
生かし工夫

国内外の先住・少数民族が、それぞれの土地ではよくんできた伝統料理を披露し合う講習・試食会が、このほど日高管内平取町で開かれた。先住民の人権や環境について意見交換した「平取町・二風谷フォーラム二〇〇五」の中で催され、並んだ料理は身近な食材を生かしており、参加者の人気を集めた。講師役となった人たちの話を交え、主料理を紹介する。（中村康利）

伝統料理に取り組みフォーラムの参加者たち

北海道新聞

2005年(平成17年)8月19日(金曜日)

20品が調理された。もちろん料理をしたのは地元のボランティアと岩崎ゼミの学生との混成チームであり、出来上がった料理の味は最高で、その成果は北海道新聞でも紹介された。

ボランティアとして参加した学生たちは、いつもは文献でしか知ることの出来ない先住民族の人たちと直接に触れて、彼らを取り巻く「人権問題」や「環境問題」また「文化継承に向けた努力」などについて学んだ。「私たちは同じアジアの隣人たちについて、何も知らないことを再認識した」という感想を持った学生が多かったようである。文化という抽象的な概念を扱う岩崎ゼミで、異なった文化を肌で感じる事が出来る貴重な体験だった。さあ、また来年もフィールドワークに行こう。

ロシア語弁論大会

Aクラス 優勝 英米文化学科 4年 中村 美樹子 (土屋ゼミ)
Bクラス 3位 英米文化学科 3年 石井 美奈子 (土屋ゼミ)

『学報』第64号で、すでに報告されているように、昨年の11月19日に行われた日本ユーラシア協会北海道連合会主催の第37回全道ロシア語弁論大会において、英米文化学科の2名の学生が素晴らしい結果を出した。4年生の中村美樹子さんがAクラス（5分間スピーチ、ロシア人審査員による質疑応答、詩の暗唱）で優勝、3年生の石井美奈子さんがBクラス（3分間スピーチ）で3位を獲得した。札幌大学や北海道大学のロシア語（あるいはロシア文学）を専門としている学生が多く出場する中で、ロシア語を専門としていない本学の学生がこのような賞を獲得するということは快挙と言うしかない。この快挙は、学生達の努力もさることながら人文学部所属の非常勤講師エレーナ・ヘインズ先生の熱心なご指導に負うところが大きい。中村美樹子さんと石井美奈子さんのスピーチの内容と感想は右記の通りである。

（寺田吉孝 記）

* * *



左：中村美樹子さん／中央：エレーナ・ヘインズ先生／右：石井美奈子さん

中村美樹子

私は今回のロシア語弁論大会へ「私のペレストロイカ」というテーマで挑みました。内容は、昔は消極的で自分に自信のなかった私が、三度のロシア留学を経験してきた中でたくさんのすばらしいロシアの人々と出会い、その人々のおかげで自分を変えることが出来たというものでした。

一昨年、この弁論大会のBクラスに出場して優勝することが出来てから、その上のAクラスでの優勝を目指して、ずっと勉強してきました。そのため、今回念願叶って優勝することが出来、なおかつ大学生生活最後の年をこんな良い結果でしめくれたことを本当に嬉しく思っています。

また、今年の6月東京で行われる全国大会へ出場することになりました。全国大会には今回以上にレベルの高い人たちが集まると思います。その人たちに負けないように、全国優勝を目指して勉強していこうと思っています。

卒業後はロシアへの長期留学を計画しています。そしてロシア語の勉強をずっと続け、将来はロシア語を活かせる職業に就きたいと思っています。

最後になりましたが、昨年も一昨年も弁論大会に際して熱心に指導して下さったエレーナ・ヘインズ先生、そしてロシア語を勉強するきっかけをくれた寺田吉孝先生にはとても感謝しています。本当にありがとうございました。

石井美奈子

私は昨年の夏休みにロシア極東・ウラジオストクに1カ月間短期留学しました。一昨年の夏休みに寺田先生の引率の下、ウラジーミルに短期留学し、日本では考えられないような刺激的な体験を沢山し、ロシアにすっかりハマってしまいました。今度はアジアとしてのロシアも見たいと思い、一人でウラジオストクへ旅立つことを決心しました。最初は不安と慣れない環境で日本に帰りたいと思うこともありましたが、色んな人に助けられ、充実した楽しい日々を過ごしました。二度のロシア留学で、私は今までとは違った角度から日本、そして世界のことを考える機会を得ました。そして何よりも、日本ではそばにいたことが当たり前のように思っていた家族や友達、周りの人が自分にとっていかに大切な存在であるかに気づきました。以上のことが、私が今回弁論大会で発表した内容です。

これからは隣国ロシアとの関係が益々重要になってきます。多くの日本人はロシア、ロシア人に対してあまり良い印象を抱いてないと思います。しかし、実際に行ってみると、その誤った認識の多さに気がつきます。良い関係を築いていくためには、まずお互いのことをよく知ることが重要だと思います。

弁論大会で入賞できたことは、私にとって大きな自信となりました。将来はロシアと関わる仕事に就きたいと思っています。そのために、どういう形でロシアと関わっていくのかを見出すことが私にとって今一番の課題です。

大 学 院 の 窓

「全体ゼミ」と大学院説明会

英米文化学科 濱 忠雄

大学院文学研究科の「全体ゼミ」は、2003年に英米文化専攻が開設されたのを機会に、修士課程と博士課程の論文作成に向けての研究発表会として始まったものです。2005年度は以下の4回開催されました。

- 第1回（6月18日） 博士課程 6名
- 第2回（7月16日） 修士課程2年 13名
- 第3回（臨時）（10月29日） 博士課程 2名
- 第4回（11月12日） 修士課程1年 12名

日本文化と英米文化の両専攻の大学院生と担当教員の全員が一堂に会したなかで行なわれる発表では、一人の持ち時間が30分と短いです。それまでの研究の蓄積を整理しながら今後の展望が提示されます。発表自体もさることながら、一段と緊張感が増すのは質疑討論です。私は初めて「全体ゼミ」に出席した時に「度肝を抜かれた」ことを憶えています。質問や助言、

あるいは叱責は研究を深化させる糧となりますし、また、他の院生の発表に触れることで貴重なヒントが得られることにもなります。

今年度は初めての試みとして、第2回と第4回の「全体ゼミ」の当日に、大学院の目的・理念や内容、応募方法などについての説明会も行なわれました。参加者はのべ25名と当初の予想をはるかに上回り、大学院への関心と期待が大きいことが窺われました。

2006年度は以下の日程で開催する予定です。

第1回（6月24日） 博士課程

第2回（7月15日） 修士課程2年、説明会

第3回（11月11日） 修士課程1年、説明会
聴講自由としていますので、学部学生も聴講

できます。大学院を進路選択の一つに考えている方はもちろん、大学院での研究に触れてみたいという皆さんの来聴を歓迎します。



〔左〕第2回「全体ゼミ」と〔右〕大学院説明会（7月16日）

大学院全体ゼミ報告

「文学研究科 2005 年度第 1 回博士課程全体ゼミ」

2005 年 6 月 18 日 (10:00 ~ 15:00) 「文学研究科 2005 年度博士課程第 1 回全体ゼミ」は 6 号館 3 階 C 33 教室 (学内外参加者約 50 名) で行われました。「全体ゼミ」とは、日本文化専攻・英米文化専攻共同で行う大学院生の発表会で、今まで恒例の「全体ゼミ」には何回も参加しましたが、博士課程の全体ゼミは初めてです。発表は午前 3 名、午後 3 名、一人発表 (質疑応答含) 40 分という具合で進行了しました。以下、その報告です (敬称は略させていただきます)。

最初は、韓国の留学生李英愛の「帰農への試み——李箕永の『故郷』をめぐる——」で、1930 年代韓国の「帰農小説」の一つである李箕永『故郷』をめぐる時代・社会背景を分析しようとしたもの。次は竹ヶ原康弘の「鎌倉幕府の宗教構造—鎌倉幕府における宗教行為と王権について」、ついで千代田明子が「木下恵介が映した女たち (1944 ~ 1954)」で、日清戦争から大東亜戦争の時代における雑誌・新聞・映画によって「描かれた未亡人」の象徴と実態をさぐる。午後は、仙波千枝『『女学世界』における婦人像の形成』が、明治から大正時代にわたって婦人雑誌として発行されたメディアを分析し、その時代を生きた女たちの実態を明らかにしようとした。吉田純「前衛短歌とは何か」は、塚本邦雄を中心とする短歌運動の「前衛」性を探り、その文学史的な位置づけを問うた。秋元裕子「滝口修造研究—ブルトン著『ナジャ』・『通低器』・『狂気』の翻訳検討」は、「和製ブルトン」と称された滝口の言説を分析し、日本におけるシュールレアリスムの受容と展開の特徴を浮き彫りにしようとするもの。発表終了後、文学研究科長大濱徹也先生の「研究を自己の問題意識の中に捉えることなくては、己の研究を深めることはできない」と厳しい指摘をもって全体ゼミが終了した。

朝から夕方まで緊張しっぱなしの一日でした。ちなみに「全体ゼミ」の特徴として、緊張感のある空気のなか、日本文化、英米文化の分野を越えてさまざまな質問が学内外の先生方々から出されたのですが、その質疑応答がどのようなかたちで突きつけられるかはわからずに、初心者としてそれをはらはらしながら聞き、そこには激しい意見のぶつかり合いのスパークリングはあるものの、開放的かつ学究的な雰囲気始終漂っていたのを感じました。あらためて学ぶことの厳しさを痛感し、心新たとした一日でした。

(文学研究科修士 2 年 鈴木真理子)

■学会・研究発表

常見 信代 「史料にあらわれたピクトとスコット」9月2日、中世ブリティッシュ・ヒストリー研究会、北海学園大学◇「スコットとアイリッシュ再考」11月26日、アイルランド研究年次大会、法政大学ボアソナードタワー

須田 一弘 「定住した狩猟採集民：マレーシア半島部先住民 Batek の時間利用」11月6日、第59回日本人類学会大会、横浜市開港記念会館

大瀧 徹也 「失われた時」を取り戻すために」8月1日、社会科教育研究会全国大会◇パネルディスカッション「現代にとっての日露戦争」

9月23日、東アジア近代史学会合同大会、10月8日NHK教育テレビ土曜フォーラムで放映◇「アーカイブズと歴史研究」11月3日、第5回台湾総督府文書学講習会、台湾歴史史料研究会

テレングト・アイトル 「フビライ・ハーンの東征と仙台の13世紀『蒙古の碑』についての調査」8月20日、中国国際モンゴル学会第4回大会、中国呼和浩特市新成賓館

中川かず子 “Historical Perspectives in relation to European and American Traditions in the Studies of Language and Language Teaching”、単独、9月、ヨーロッパ日本研究学会国際大会、ウィーン大学◇「北海道在住外国人への日本語支援活動のネットワークとメディアータの役割」、共同、9月、日本教育心理学会、北海道浅井学園大学

大塚 秀之 「ウォルマートをめぐる諸問題—資料紹介を中心に—」9月、アメリカ研究会、北海学園大学

土屋 博 「宗教学における『当事者性』」9月、日本宗教学会第64回学術大会、関西大学

大石 和久 「映画と〈光〉としての世界—反現象学的なドゥルーズの映画（イメージ）論について」10月9日、第56回美学会全国大会、慶應義塾大学

■著作・論文

安酸 敏眞 「中間時の思想—ラインホルド・ニーバーに関する一断想」11月、『歴史と神学—大木英夫教授喜寿記念献呈論文集』上巻（古屋安雄・倉松功・近藤勝彦・阿久戸光晴編）、聖学

院大学出版会◇「トレルチと『歴史主義』の問題」12月、『年報 新人文学』（北海学園大学大学院文学研究科）第二号

小野寺静子 「万葉秀歌抄」（巻四・五二七、六八八、巻八・一四四七）『セミナー万葉の歌人と作品 第十二巻』和泉書院、平成17年11月15日

大瀧 徹也 「長谷川良信とその時代」6月30日、『淑徳社会福祉研究』12号1—18頁、淑徳大学社会福祉学会◇『はこだて北原山高野寺の歴史』（監修）10月18日、A5版224頁、高野寺

テレングト・アイトル 「戦争と鎮魂—元軍戦死者怨霊追善碑をめぐる—（上）」『人文論集』第31号、北海学園大学、7月◇「戦争と鎮魂—元軍戦死者怨霊追善碑をめぐる—（下）」『人文論集』第32号、北海学園大学、11月

宝利 尚一 「米欧メディアの戦争報道（下）」『人文論集』第32号、北海学園大学、11月

大塚 秀之 「貧しいアメリカ—ハリケーン「カトリーナ」が明るみに出した貧困と人種—」12月、『経済』124号（2006年1月号）、新日本出版社

Kirkwold, L. (2005). Peter Gzowski's early career as journalist and broadcaster: From the mid-1950's to the mid-1970's. *Studies in Culture* 31, 123-166. ◇Applications of universal grammar (UG) in the EFL/ESL, classroom. *Studies in Culture* 32, 59-94.

岩崎まさみ 『人間と環境と文化』清水弘文堂◇「沙流川流域のアイヌ民族の食文化に関する応用研究（上）」『新人文学』北海学園大学大学院文学研究科◇「社会影響評価の手法と二風谷ダムの事例」『開発論集第76号』北海学園大学開発研究所

■講演など

濱（浜） 忠雄 「ハイチからみたフランス革命」6月、専修大学歴史学研究センター第3回国際シンポジウム「21世紀におけるフランス革命研究の現状と課題」、専修大学神田校舎◇「中南米諸国における自立とカトリシズム」10月、人文学部第13回市民公開講座「現在、宗教を問う」、

北海学園大学教育会館

土屋 博 シンポジウム「戦争と平和—宗教の視点から—」(司会とまとめ) 7月、日本学術会議、日本学術会議大会議室◇『『宗教』概念の再検討が求められる背景』10月、北海学園大学人文学部第13回市民公開講座、北海学園大学教育会館

桑原 俊一 「人文学部の13年—グローバル化と地域の期待の中で—」第4回日口国際シンポジウム、10月4日、北海学園大学国際会議場

安酸 敏真 「現在、宗教を問う」第5回「近代合理主義と宗教」11月5日、北海学園大学人文学部第13回市民公開講座、北海学園大学教育会館

大瀧 徹也 「寺史」編纂が問いかける世界、6月30日、本願寺札幌別院信徒会特別講演会、本願寺札幌別院◇「日本の公文書館」7月4日、平成17年度公文書保存管理講習会、独立行政法人国立公文書館◇「公文書館論」9月26日、平成17年度公文書館専門職員養成課程、独立行政法人国立公文書館◇「現代布教論」10月8日、10月22日、11月19日、立正佼成会学林◇「三谷民子が問いかけたこと」10月24日、女子学院創立記念日集会

■評論・エッセイなど

濱(浜) 忠雄 「2枚の『アルプスを越えるボナバルト』」8月、『人文フォーラム』23号

土屋 博 書評：荒木美智雄編著『世界の民衆宗教』6月、『宗教研究』344、日本宗教学会◇「特集：世界三大宗教 ここが違う—仏教・キリスト教・イスラーム—」(分担執筆) 7月、『大法輪』7月号、大法輪閣

郡司 淳 「読書について」2004年8月『人文フォーラム』21◇「私にとっての歴史学」『入試GUIDE2006』◇「図書館ノスゝメ」2005年4月『図書館だより』第27巻1号(通巻173号)◇「藻岩山雑感」2005年8月『人文フォーラム』23◇「史料紹介 六週間現役兵の日誌」2005年3月『北海学園大学 人文論集』第30号◇辞典項目：「英霊」「簡閲点呼」「金鶏勲章」「軍歌」「軍楽隊」「軍事郵便」「軍票」「軍夫」「憲兵」「国民軍人員表」「師管・聯隊区」「出征」

「出征徴兵慰労義会」「出征兵士の家」「焼夷弾」「従軍看護婦」「松根油」「戦陣訓」「大詔奉戴日」「八紘一宇」「兵役」2005年6月、歴史学会編『郷土史大辞典』朝倉書店

小野寺静子 「古典散策 月の光を仰ぎ見て作る歌」『芸林』68-9 芸林発行所 平成17年9月10日

宝利 尚一 新聞比較論「なぜ違う? 読売・朝日投書欄」月刊ウィング・サッポロ 2005年7月号◇「新聞はイラクを伝えているか」同8月号◇「情報源の秘匿は認められない?」同9月号◇「朝日は説明責任を果たしたか」同10月号◇「朝日の体質は変わらないのか」◇同11月号◇「ジャーナリズムは信頼できるか」同12月号
大塚 秀之 「貧困、人種、そしてハリケーン『カトリナ』」10月、『季刊 人権問題』341号(2005年秋号)、兵庫人権問題研究所

■その他

大瀧 徹也 「北海道開教史編纂にあたり」『北海道教区時報』202号、本派本願寺北海道教区事務所◇「三谷民子とその時代」『女子学院同窓会会報』36号、10月1日、女子学院同窓会◇「宗教史の地層発掘 22 東京都」『中外日報』26816号、11月26日

中川かず子 「ウチとソトの日本語」、公開模擬授業、10月、北海学園大学

大石 和久 さっぽろ映画祭市民委員会(副事務局長)◇キノ映画講座「映画と北海道」11月20日、シアターキノ



表紙：^{はたあわきまろ} 秦檣丸（村上島之允）「イドビルカチカップ
圖」：『蝦夷島奇観』（1800年7月自序、墨筆画、折
本、28.5×20.5cm、北駕文庫所蔵）より

『蝦夷島奇観』は1798（寛政10）年～1806（文化3）年まで幕史・普請役御雇として蝦夷地の地理・風俗・産物などを調査した村上島之允（1760〔宝暦10〕～1808〔文化5〕）がアイヌ民族の習俗を忠実に描き、解説とともに後世に伝える有名な民俗資料である。

「イドビルカチカップ圖」に描かれたエトピリカは、チドリ目ウミスズメ科の海鳥。奥蝦夷地（千島列島）などに生息し、家鴨ぐらいの大きさである。体は黒褐色で脚は赤い。「イド」は夷語で鼻（嘴）。「ビルカ」善（美しい）。「チカップ」は鳥。「チュブカ」夷地名、千島列島。其所にては此鳥を捕えて骨を焼き肉を食べたと言う。（北駕文庫 吉田千萬 記）

編 集 後 記

本号ではカナダ・ブロック大学の語学研修の参加学生3名に率直な感想を寄稿してもらったが、昨年9月の研修直後のエッセイでも参加者全員がそれぞれの体験に加えて、一様に異文化体験と他国学生との英語での交流の楽しさと意義に触れている。研修を機に本学を休学してIELPの長期プログラムに参加した学生も数名いる。わずか3週間とはいえ、この海外研修が多感な若者に与える影響力と意義をあらためて実感している。（TK）

本号には永井秀夫先生、奥田崇之両先生を偲ぶ追悼文を掲載いたしました。永井先生、奥田先生は人文学部の創生期にあってその礎を築いてくださった先生方です。私には個人的にも両先生ともにお世話になった思い出があります。両先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。（大石和久）